人生は場所が９割

――氣質を生かす場所との出会い――

目次

はじめに

なぜ場所が人生を変えるのか

第 1 章

違和感は場所から始まる

- 都会にも、その土地に生かされる人がいる
- 私の身体は別のリズムを求めていた
- 湯河原へ戻ると呼吸が変わる
- 場所には氣質がある
- 違和感は人生からのメッセージ
- 人生は場所から変わり始める

第 2 章

氣質とは身体が覚えている原風景

- 氣質は性格より深い
- 身体は風景を記憶している
- 原風景は人生の土台になる
- 人は自分の風景を探している
- 私の原風景
- 氣質は優劣ではない
- 氣質は人生の羅針盤である

- 本来の場所は身体が知っている

第 3 章

不死氣の川、永遠の千歳川

- 不死氣の川・藤木川
- 永遠の川・千歳川
- 新崎川が教えてくれること
- 川は地域の個性を育てる
- 火山がつくった川の舞台
- 家系という、もうひとつの川
- 流れが交わる場所

第 4 章

火山と温泉が育てた大地のエネルギー

- 山はなぜ高くなるのか
- 大木もまた同じである
- 地形はエネルギーの履歴書である
- 火山がつくった湯河原
- 温泉は地球からの贈り物
- 湯治場が育てた時間
- 人もまた自然の一部である
- 大地のエネルギーは人を本来の姿へ戻す

第 5 章

家系という、もうひとつの川

- 人は一人で生まれてくるわけではない
- 家系は時間の川である
- 家系が土地を選び、土地が家系を育てる
- 受け継がれるもの
- 家系にも氣質がある
- 家系の流れと出会い
- 自分がどこから来たのか
- 本来の速度を思い出す

第 6 章

身体が整う瞬間

- 身体は頭より先に知っている
- 谷には谷の安心感がある
- 川の音は心の速度を整える
- 山は人生を長い時間で見せてくれる
- 温泉は身体を地球につなぐ
- 身体が整うと出会いが変わる
- 身体が整うと本来の自分が現れる
- 人生は身体から変わる

第 7 章

人生が変わる場所

- 同じ人なのに人生が変わる
- 場所には人を育てる力がある
- 出会いは偶然では終わらない
- あなたが引き寄せたのか、場所が引き寄せたのか
- 思いは種であり、場所は土壌である
- 人生は場所が九割
- 氣質が場所を求め、場所が氣質を目覚めさせる
- 人生が変わる場所とは

第 8 章

宇宙船地球号と私たちの座標

- 私たちは皆、宇宙船地球号の乗組員である
- 地球には無数の氣質がある
- 人にはそれぞれの座標がある
- 湯河原は私の座標だった
- 「ここではない」という感覚も座標の一部である
- 宇宙船地球号はあなたの味方である
- あなたの場所は必ずある
- 座標との出会いは人生を自由にする

第 9 章

Imagine ——今、神を想う

- 場所を探す旅を続けてきた

- 人生は出会いによってつくられる
- 場所は人生の土壌である
- あなたはすでに奇跡の中にいる
- 宇宙船地球号の本当の意味
- 場所を愛することは地球を愛すること
- 宇宙から見れば、私たちはすでに豊かである
- Imagine ——想像してごらん
- 人生は場所から始まり、地球へ帰っていく

終章

人生は場所から静かに軽くなる

- 人生を変えるのは大きな決断だけではない
- 氣質はあなたを裏切らない
- 流れに逆らわない
- 比べる必要はない
- あなたを生かす場所は必ずある
- すでに与えられているもの

あとがき

あなたの座標へ

はじめに

なぜ場所が人生を変えるのか

私は長いあいだ、人の人生は努力や能力によって決まるものだと思っていた。

もちろん、それは間違いではない。

努力は人生を変える。

学びは人生を変える。

出会いも人生を変える。

けれど、年齢を重ね、建築を学び、地形を見続けてきた今、私はもう一つの大切な要素があることを確信している。

それは「場所」である。

若い頃、私は建築を学びながら東京で過ごした。

東京郵政局設計部や都市環境研究所でのアルバイトを通して、多くの建築や都市のあり方に触れる機会を得た。東京には東京の力がある。都市の持つ密度、情報、人との出会い、そこから生まれる創造性。都会に生かされる人も確かにいる。私はそのことを否定したいのではない。むしろ、その価値をよく知っているつもりである。

しかし同時に、私は自分自身の身体の中に微かな違和感を感じていた。

説明はできない。

不満でもない。

ただ、どこか本来の自分から少し離れているような感覚である。

その正体がわかったのは、湯河原へ戻ったときだった。

谷の空気。

川の流れ。

山の稜線。

温泉の湯気。

その中に身を置いた瞬間、呼吸が深くなった。

身体の奥にあった緊張がほどけていくのを感じた。

私はその時初めて気づいた。

人は頭だけで生きているのではない。

土地の空気を吸い、土地の時間を生き、土地の流れの中で生かされているのだと。

そこから私の探求が始まった。

なぜ人は特定の場所に惹かれるのだろう。

なぜ同じ人間が、場所によって生き生きとしたり、力を失ったりするのだろう。

なぜ人生を変える出会いは、特定の場所で起こるのだろう。

その問いを追い続ける中で、私は「氣質」という言葉にたどり着いた。

人にはそれぞれ固有の氣質がある。

身体が覚えている原風景がある。

そして、その氣質と響き合う場所がある。

その場所に立ったとき、人は本来の自分を思い出す。

呼吸が深くなる。

身体が整う。

出会いが変わる。

人生の流れが変わる。

私はそのことを、

「人生は場所が 9 割」

という言葉で表現した。

しかし、この本で私が語りたい場所とは、単なる住所や不動産の話ではない。

川の流れであり、

火山が育てた山や谷であり、

温泉が運ぶ地球の熱であり、

家系という時間の流れであり、

人との出会いであり、

そして最後には、

宇宙船地球号そのものである。

私たちは皆、この美しい地球という船の乗組員である。

それぞれ異なる氣質を持ち、

それぞれ異なる座標を持ちながら、

人生という旅を続けている。

この本は、湯河原についての本であると同時に、人と場所についての本であり、地球についての本でもある。

もし今、あなたが少しでも違和感を抱えているなら。

もし今、自分の居場所を探しているなら。

もし今、人生の流れを変えたいと思っているなら。

どうか安心して読み進めてほしい。

あなたを生かす場所は必ずある。

そして、その場所は思っているより遠くないかもしれない。

この本が、あなた自身の氣質と出会い、あなた自身の座標を見つけるための小さな羅針盤になれば、これ以上の喜びはない。

第 2 章

氣質とは身体が覚えている原風景

私は「氣質」という言葉をよく使う。

しかし、それは一般に言われる性格や個性とは少し違う。

明るい人。

内向的な人。

積極的な人。

慎重な人。

そうした分類は性格の説明にはなるかもしれない。

けれど私が感じている氣質は、もっと深い場所にある。

それは思考よりも先に働き、言葉になる前から私たちの人生に影響を与えている。

私は氣質を、

身体が覚えている原風景

だと考えている。

■ 氣質は性格より深い

性格は変わる。

若い頃と今では考え方も違う。

経験によって価値観も変わる。

社会的な立場によっても人は変化する。

しかし氣質は違う。

表面的には変化しても、その人の奥にある感覚は不思議なほど変わらない。

山を見ると安心する人がいる。

海を見ると元気になる人がいる。

静かな場所で力を取り戻す人がいる。

人の集まる場所で生き生きする人がいる。

それは理屈ではない。

身体が知っているのである。

どこで呼吸しやすいのか。

どこで心が落ち着くのか。

どこで本来の力を発揮できるのか。

その感覚こそが氣質なのだと思う。

■ 身体は風景を記憶している

私は人の身体には記憶があると思っている。

それは頭で覚えている記憶とは少し違う。

幼い頃に見た風景。

聞いていた音。

吸い込んでいた空気。

雨上がりの匂い。

夕暮れの光。

川の音。

山の形。

そうしたものが身体の奥に積み重なっている。

大人になってから初めて訪れた場所なのに、なぜか懐かしく感じることがある。

反対に、多くの人が快適だと言う場所なのに、自分だけ落ち着かないこともある。

それは身体が風景を記憶しているからではないだろうか。

身体は理屈で判断していない。

もっと深いところで、その場所との相性を感じ取っているのである。

■ 原風景は人生の土台になる

人には誰にも原風景がある。

それは単なる思い出ではない。

人生の土台になっている風景である。

子どもの頃に見上げた空。

家の近くを流れていた川。

毎日歩いた道。

山並み。

海の色。

風の匂い。

それらは成長するにつれて忘れていく。

しかし身体は忘れない。

人生に迷ったとき、

疲れたとき、

立ち止まったとき、

人は無意識にその原風景へ戻ろうとする。

なぜなら、その場所にこそ最も自然だった自分がいるからである。

■ 人は自分の風景を探している

私は人生とは、自分の風景を探す旅なのではないかと思っている。

進学もそうである。

就職もそうである。

転居もそうである。

旅もそうである。

私たちは未来を探しているようでいて、本当は自分自身を探している。

そして自分自身を探しているようでいて、本当は自分が最も自然でいられる風景を探しているのかもしれない。

氣質に合う場所へ近づくと身体が反応する。

呼吸が深くなる。

安心する。

また行きたくなる。

それは偶然ではない。

身体が「ここだ」と感じているのである。

■ 私の原風景

私にとって、その原風景は湯河原だった。

谷に囲まれた地形。

川の流れ。

山の稜線。

温泉地特有の湿り気を含んだ空気。

子どもの頃、それは特別なものではなかった。

毎日の当たり前だったからである。

しかし東京で学び、多くの土地を見てきた今、私はその意味を理解できるようになった。

私の身体は、この風景の中で育っていた。

だから戻ると呼吸が深くなる。

だから安心する。

それは単なる郷愁ではない。

私の氣質が原風景と再会しているのである。

■ 氣質は優劣ではない

ここで誤解してほしくないことがある。

氣質に優劣はないということである。

都会の氣質が良くて田舎の氣質が悪いわけではない。

山が良くて海が悪いわけでもない。

どれも必要であり、どれも価値がある。

重要なのは、自分に合っているかどうかである。

他人にとって最高の場所が、自分にとっても最高とは限らない。

反対に、他人には理解されなくても、自分にとってかけがえのない場所がある。

人生を豊かにするのは、世間が評価する場所ではなく、自分の氣質と響き合う場所なのである。

■ 氣質は人生の羅針盤である

私は氣質を人生の羅針盤だと思っている。

羅針盤は目的地そのものを教えてくれるわけではない。

しかし進む方向を示してくれる。

氣質も同じである。

どこへ行けばよいのか。

何を選べばよいのか。

その答えを直接教えてくれるわけではない。

けれど、

呼吸が深くなる方向。

身体が軽くなる方向。

心が静かになる方向。

その方向を示してくれる。

だから私は、人生に迷ったときほど身体の感覚を大切にしたいと思っている。

■ 本来の場所は身体が知っている

私たちは頭で人生を考える。

しかし本当に大切なことは、身体が先に知っていることが少なくない。

なぜか気になる場所。

理由はわからないのに心が惹かれる風景。

そこへ行くと安心できる土地。

そうした感覚を軽視してはいけない。

そこには氣質からの静かなメッセージがある。

氣質とは身体が覚えている原風景である。

そして原風景は、人生のどこかで私たちを本来の場所へ導いてくれる。

私はそう信じている。

第 3 章

不死氣の川、永遠の千歳川

——川が育む土地の氣質

氣質という内なる風景を考えるとき、私はいつも川のことを思う。

人の人生は流れである。

昨日があり、今日があり、明日がある。

立ち止まることはあっても、本当は止まってはいない。

身体の中を血液が流れ、季節が流れ、時間が流れ、人生が流れている。

だから私は、土地を見るときも流れを見る。

地図ではなく流れ。

建物ではなく流れ。

風景の背後にある、目には見えない流れを見ようとしている。

そして湯河原という土地を見つめたとき、私の前に現れたのが川だった。

川は単なる水ではない。

その土地の氣質そのものなのである。

■ 不死氣の川・藤木川

湯河原の山あいを流れる藤木川には、独特の力がある。

私は子どもの頃からこの川を見て育った。

雨の日もある。

渇水の年もある。

台風の日もある。

それでも川は流れ続ける。

姿を変えながらも、その流れを失うことはない。

私は藤木川を見ていると、生命そのものを見ている気持ちになる。

人は生きていれば傷つく。

失敗もする。

迷いもする。

時には立ち止まりもする。

しかし生命は終わらない。

再び立ち上がる。

再び流れ始める。

私はその力を「不死氣」と呼んでいる。

不死とは死なないことではない。

何度でも再生する力である。

藤木川は、その不死氣を谷全体へ送り続けているように見える。

だから私は、この川の近くに立つと不思議と前向きな気持ちになる。

生命とは強さではなく、流れ続けることなのだと教えられるのである。

■ 永遠の川・千歳川

藤木川が生命の川なら、千歳川は時間の川である。

千歳という名前には長い年月への祈りが感じられる。

私はこの川のほとりに立つたびに、不思議な感覚になる。

目の前を流れる水は一瞬たりとも同じではない。

しかし川そのものは変わらない。

昔、この流れを見ながら暮らした人がいた。

旅人がいた。

温泉を訪れた人がいた。

文化人や芸術家たちも、この川音を聞きながら歩いたかもしれない。

そして未来の誰かもまた、この流れを見ることになる。

水は流れ去る。

それでも川は残る。

私はそこに時間の本質を見る。

時間とは失われるものではなく、受け継がれていくものなのではないか。

千歳川は過去と現在と未来を静かに結び続けている。

だから私は、この川を「永遠の川」と呼びたいのである。

■ 新崎川が教えてくれること

真鶴寄りには新崎川が流れている。

この川は藤木川や千歳川とはまた違った表情を持っている。

温泉街を流れる川ではない。

そのため同じ湯河原町の中でも、そこには異なる時間が流れている。

私は新崎川を見るたびに思う。

土地には一つの顔しかないわけではないということを。

同じ町であっても、

流域が違えば風景が変わる。

暮らしが変わる。

空気が変わる。

人との関係も変わる。

川は地域の個性を育てている。

新崎川は、湯河原という土地の多様さを教えてくれる存在である。

■ 川は地域の個性を育てる

人は川の近くに暮らしてきた。

水を得るためだけではない。

川は人々を結び、文化を育て、暮らしの基準をつくってきた。

川の近くで遊んだ記憶。

川沿いの道。

橋を渡る風景。

地域の祭り。

季節ごとの風物。

それらはすべて川と共に育まれてきた。

だから川には単なる水以上のものが流れている。

記憶が流れている。

文化が流れている。

人々の時間が流れている。

私は川を見るたび、その土地全体の人生を見ているような気持ちになるのである。

■ 火山がつくった川の舞台

しかし川だけでは存在できない。

山があり、

谷があり、

雨があり、

はじめて川は生まれる。

湯河原の山々や谷は、長い地球の歴史の中で形成されてきた。

火山活動によって地形が生まれ、その中を水が流れ、現在の川になった。

川は単なる水の流れではない。

地球が長い時間をかけてつくり上げた作品なのである。

私たちが川辺に立つと安心するのは、その流れの奥にある大きな時間を身体が感じているからなのかもしれない。

■ 家系という、もうひとつの川

土地に川があるように、人の中にも川がある。

それが家系である。

祖父母から親へ。

親から子へ。

そして未来の世代へ。

命が受け渡され、

想いが受け渡され、

記憶が受け渡されていく。

私は家系もまた川だと思っている。

一本の流れがあり、

ときに合流し、

ときに分かれながら、

静かに未来へ向かっている。

人は一人では生きていない。

私たちの背後には、多くの時間が流れているのである。

■ 流れが交わる場所

不死氣の藤木川。

永遠の千歳川。

地域の個性を育む新崎川。

火山がつくった谷。

そして家系という人の流れ。

そのすべてに共通しているものがある。

それは「流れ」である。

私は地形を見るとき、形だけを見ているのではない。

流れを見ている。

生命の流れ。

時間の流れ。

文化の流れ。

家系の流れ。

そして人生の流れ。

それらが重なり合う場所で、人は自分の氣質の奥にある本来の速度を思い出す。

地形とは単なる景色ではない。

川とは単なる水ではない。

それは長い時間をかけて育まれた流れが、目に見える姿になったものなのである。

第 4 章

火山と温泉が育てた大地のエネルギー

第 3 章では、川の流れについて見てきた。

藤木川の不死氣。

千歳川の永遠の時間。

新崎川が教えてくれる地域ごとの個性。

私は川を見ながら、その土地の氣質を感じてきた。

しかし川だけを見ていても、土地の本質は見えてこない。

なぜなら川には、その流れを生み出した舞台があるからである。

山があり、

谷があり、

火山があり、

温泉がある。

川の背景には、さらに大きな地球の営みが存在している。

私は長年地形を見ながら、人間の人生にも地球の営みにも共通するものを感じるようになった。

それは、目に見えるものの背後には必ず目に見えない働きがあるということである。

■ 山はなぜ高くなるのか

私は若い頃から山を見るのが好きだった。

建築を学び始めてからは、建物より先に土地を見るようになった。

その頃からずっと考えていることがある。

それは、

高い山には、その山を高くした力があるのではないか。

ということである。

私はこれを科学的な理論として言っているわけではない。

地形を見続ける中で生まれた一つの仮説であり、感覚である。

私たちは山を見る。

しかし本当に見ているのは山だけだろうか。

私は、その山を生み出した長い時間と働きを見ているような気持ちになる。

山は突然現れたわけではない。

地球の内部で起きる活動が何万年、何十万年もの時間をかけて形になったものである。

目の前にある高い山は、その積み重ねられた力の結果なのである。

■ 大木もまた同じである

私は木を見ても同じことを感じる。

神社の境内に立つ大木。

山の斜面に育つ古木。

人はそうした木を見ると圧倒される。

それは大きいからだけではない。

私たちは、その木を育てた時間を感じているのだと思う。

土があり、

水があり、

光があり、

風があり、

長い歳月がある。

それらすべてが積み重なって一本の大木になる。

私は大木を見るたびに思う。

その木の大きさは、その木を育てた環境の歴史なのだと。

■ 地形はエネルギーの履歴書である

山も木も川も同じである。

私たちは風景を見ている。

しかし本当は、その風景を生み出した履歴を見ているのかもしれない。

私は時々、

「地形とはエネルギーの履歴書である」

と思う。

山には山を立ち上がらせた力がある。

谷には谷を刻んだ力がある。

川には川を流し続けた力がある。

それらは今は目に見えない。

しかし確かに存在した。

地形とは、長い時間をかけて働いた力の記録なのである。

だから人は風景に感動するのだろう。

ただ美しいからではない。

その背景にある時間と力を、身体が感じ取っているからである。

■ 火山がつくった湯河原

湯河原という土地もまた、そのような長い時間の記録の上に存在している。

山々があり、

谷があり、

川が流れ、

海へとつながっている。

現在の穏やかな風景からは想像しにくいが、その背景には火山活動があった。

地球の内部で生まれた力が山をつくり、谷をつくり、水の流れを生んだ。

私たちが見ている風景は、地球が長い歳月をかけて描いた作品なのである。

私は湯河原の山々を見るたびに、その背後にある大きな時間を感じる。

それは人間の人生よりはるかに長く、深い時間である。

■ 温泉は地球からの贈り物

火山の力は、温泉という形で今も地表へ現れている。

私は温泉を単なるお湯だと思ったことがない。

温泉は地球の内部と私たちをつないでいる。

地下深くで育まれた熱。

長い年月をかけて蓄えられたエネルギー。

それが水によって地上へ運ばれてくる。

温泉とは、地球からの贈り物なのである。

温泉に入ると身体が温まる。

呼吸が深くなる。

緊張がほどけていく。

それは身体だけの変化ではない。

心まで静かになる。

私はその時間を、とても大切にしている。

■ 湯治場が育てた時間

湯河原には温泉だけではなく、湯治場としての歴史がある。

多くの人がこの土地を訪れ、

身体を休め、

人生を見つめ直し、

再び歩き始めてきた。

その時間の蓄積が、湯河原という土地の氣質をつくっている。

私はときどき思う。

温泉地の魅力とは湯そのものではなく、

そこで流れてきた時間

なのではないかと。

人々の祈り。

休息。

回復。

再出発。

そうした時間が積み重なり、土地の空気になっている。

■ 人もまた自然の一部である

現代社会では、人は自然から独立して存在しているように感じることがある。

しかし本当は違う。

私たちもまた自然の一部である。

山を見て安心する。

川を見て落ち着く。

森の中で深呼吸したくなる。

温泉で身体が緩む。

それは身体が自然とのつながりを忘れていないからである。

氣質とは、人と自然を結ぶ感覚でもあるのだと思う。

■ 大地のエネルギーは人を本来の姿へ戻す

藤木川の不死氣。

千歳川の永遠の時間。

火山がつくった山と谷。

地球の熱を運ぶ温泉。

それらは別々の存在ではない。

すべてが一つの流れの中でつながっている。

私は湯河原に立つと感じる。

この土地には、人を本来の姿へ戻してくれる力がある。

それは特別な奇跡ではない。

山を高くした力。

木を大きくした力。

川を流し続ける力。

温泉を湧かせる力。

そうした長い時間の積み重ねが、人の身体に静かに働きかけているのである。

私たちは地球の上で生きている。

そして地球は今もなお、静かに私たちを育て続けているのである。

Copilot said:

第 5 章

家系という、もうひとつの川

第 3 章では、藤木川や千歳川を通して、土地に流れる時間を見つめてきた。

第 4 章では、火山や温泉が生み出した大地のエネルギーについて考えた。

そして私は、その流れを見つめながら、もう一つの川の存在に気づくようになった。

それは人の中を流れる川である。

家系という流れだ。

川が山から海へ流れるように、人の命もまた過去から未来へ流れている。

私たちは自分一人で生きているように感じることがある。

しかし本当は、多くの命と時間の流れの中に存在しているのである。

■ 人は突然現れるわけではない

私たちは人生を自分のものとして生きている。

それは間違いではない。

しかし自分の人生を振り返ると、その始まりは自分ではないことに気づく。

親がいる。

祖父母がいる。

さらにその前にも多くの人がいる。

自分という存在は、その長い流れの先端に現れた一滴の水のようなものなのかもしれない。

川の水は常に入れ替わる。

しかし川そのものは流れ続ける。

人もまた同じである。

個人の命は限られている。

しかし家系という流れは続いていく。

■ 家系は時間の川である

私は千歳川の流れを見ていると、家系のことを考える。

川は過去から現在へ流れてくる。

そして現在から未来へ流れていく。

家系もまた同じである。

祖父母から親へ。

親から子へ。

子から未来の世代へ。

そこには目には見えない時間が流れている。

名前を受け継ぐこともある。

土地を受け継ぐこともある。

仕事や価値観を受け継ぐこともある。

時には受け継がれたものに反発しながら生きることもある。

それでも私たちは、流れの外にはいない。

家系とは、人の時間の川なのである。

■ 家系が土地を選び、土地が家系を育てる

私は地形を見ながら、人と土地の関係を考えてきた。

その中で気づいたことがある。

家系と土地とは切り離せないということである。

ある家系は山の近くで暮らしてきた。

ある家系は海のそばで暮らしてきた。

ある家系は川沿いの集落で生きてきた。

人が土地を選んだように見える。

しかし長い目で見れば、土地もまた人を育てている。

湯河原の谷で育った人には、谷の時間が流れている。

海辺で育った人には、海の時間が流れている。

土地の氣質と家系の時間は、静かに重なり合いながら受け継がれていくのである。

■ 受け継がれるもの

家系から受け継ぐものは血筋だけではない。

働き方。

ものの見方。

時間との付き合い方。

人との距離感。

好きな風景。

安心する場所。

そんな目に見えないものも受け継がれていく。

若い頃は気づかない。

しかし年齢を重ねるにつれて、自分の中に親や祖父母の面影を発見することがある。

「ああ、自分も同じことを考えている」

そう感じる瞬間がある。

家系とは過去のものではない。

今も私たちの中を流れているものなのである。

■ 家系にも氣質がある

私は長年、氣質について考えてきた。

そして最近、家系にもまた氣質があるのではないかと思うようになった。

もちろん人は一人ひとり違う。

同じ家族でも個性は異なる。

しかし不思議なことに、どこか共通した雰囲気や価値観がある。

自然を大切にする家系。

職人として生きてきた家系。

学ぶことを大切にしてきた家系。

人を支えることを大切にしてきた家系。

それらは何代にもわたって流れ続ける。

家系とは、血だけではなく、生き方の流れでもあるのである。

■ 家系の流れと出会い

人生を振り返ると、多くの出会いがある。

その出会いは偶然に見える。

しかし本当にそうだろうか。

親がこの土地に住まなければ出会えなかった人がいる。

祖父母がこの仕事をしていなければ生まれなかった縁がある。

川が流域を育てるように、家系もまた人生の舞台をつくっている。

私たちは思っている以上に、大きな流れの中で人と出会っているのである。

■ 自分がどこから来たのか

現代社会では、「どこへ行くか」が重視される。

将来どうなるのか。

どこで成功するのか。

何を目指すのか。

けれど私は、「どこから来たのか」を考えることも同じくらい大切だと思う。

家系を知ることは、過去に縛られることではない。

自分の立っている場所を知ることである。

どのような時間が流れ、

どのような土地があり、

どのような命に支えられて今ここにいるのか。

それを知ることは、自分自身を深く理解することにつながる。

■ 本来の速度を思い出す

藤木川の不死氣。

千歳川の永遠の時間。

火山と温泉が育てた大地。

そして家系という人の流れ。

それらを見つめていると、すべてに共通するものが見えてくる。

それは「流れ」である。

生命は流れる。

時間は流れる。

川は流れる。

家系も流れる。

私は、人が安心するときとは、自分がその流れの一部であることを思い出したときではないかと思う。

一人で頑張らなくてもいい。

自分は長い時間の続きの中にいる。

そう感じられたとき、人は肩の力が抜ける。

本来の速度へ戻っていく。

家系というもうひとつの川は、今日も静かに未来へ流れ続けているのである。

第 6 章

身体が整う瞬間

——場所は人を本来の姿へ戻してくれる

私はこれまで、

氣質について考えてきた。

川の流れについて考えてきた。

火山と温泉が育てた大地について考えてきた。

そして家系という時間の流れについても見つめてきた。

それらを一つひとつ辿っていくと、最終的に戻ってくる場所がある。

それは身体である。

どれほど立派な理論も、身体が納得していなければ人生は軽くならない。

どれほど良い環境でも、身体が受け入れなければ本来の力は発揮されない。

反対に、身体が整うと人生は驚くほど自然に動き始める。

私は長い年月を通して、そのことを少しずつ理解するようになった。

■ 身体は頭より先に知っている

私たちは普段、頭で人生を考えている。

正しいか。

間違っているか。

損か得か。

成功するか失敗するか。

しかし身体は別の基準で生きている。

ある場所へ行くと呼吸が深くなる。

ある人に会うと安心する。

ある風景を見ると身体の力が抜ける。

理由は説明できなくても、身体はすでに答えを知っている。

私は人生の中で何度もそんな経験をしてきた。

頭では理解できなくても、身体はその場所との相性を感じ取っているのである。

■ 谷には谷の安心感がある

湯河原へ戻ると、私はいつも同じ感覚を覚える。

谷に包まれる感覚である。

見上げれば山がある。

耳を澄ませば川の音がある。

遠くには海の気配も感じる。

その地形の中にいると、不思議と安心する。

なぜなのかはわからない。

けれど身体は知っている。

この風景の中で育ち、

この空気を吸ってきたことを。

湯河原が優れているという話ではない。

私の氣質と、この谷の氣質が響き合っているのである。

人にはそれぞれ、そうした場所があるのだと思う。

■ 川の音は心の速度を整える

川の流れを見ていると、不思議と気持ちが落ち着く。

藤木川も。

千歳川も。

急いでいるように見えない。

しかし止まってもいない。

ただ自然に流れている。

私は川を見るたびに、人間も本来こういう存在なのではないかと思う。

必要以上に急ぐことはない。

立ち止まり続ける必要もない。

自分の流れを信じて進めばよい。

川の音には、人の心を本来の速度へ戻してくれる力があるように感じている。

■ 山は人生を長い時間で見せてくれる

山を見ると、自分の悩みが少し小さく見えることがある。

悩みが消えるわけではない。

けれど見え方が変わる。

山は何千年、何万年という時間の中でそこに立っている。

その時間の長さに触れると、自分が抱えている問題も人生の一場面として見ることができる。

山は何も語らない。

しかし存在そのものが、人の心を落ち着かせる。

私はそれを何度も感じてきた。

人間は短い時間を生きている。

だからこそ長い時間を持つ風景に救われることがあるのだと思う。

■ 温泉は身体を地球につなぐ

温泉に入ると、人は自然とため息をつく。

身体の緊張がほどけるからだ。

私は温泉を、単なる入浴施設として見ることができない。

温泉は地球の内部から届けられる熱である。

何万年もの時間を経て蓄えられた大地のエネルギーが、水によって地表へ導かれている。

その熱に身体が触れる。

すると身体だけでなく心まで整っていく。

私はそこに、人間と地球のつながりを感じる。

温泉に浸かることは、地球の時間に触れることなのかもしれない。

■ 身体が整うと出会いが変わる

人生を変えるのは決断だと思われがちである。

しかし実際には、その前に身体の状態が変わっていることが多い。

身体が整う。

呼吸が深くなる。

視野が広がる。

余裕が生まれる。

すると出会う人が変わる。

話す言葉が変わる。

興味を持つことが変わる。

そして人生の流れが少しずつ動き始める。

私は多くの人を見ていて、そのことを強く感じている。

人生は頭だけで変わるのではない。

身体から変わり始めるのである。

■ 身体が整うと本来の自分が現れる

人は無理をして生きることもできる。

頑張ることもできる。

しかし長く続けるためには、自分の氣質に合った場所が必要になる。

氣質に合う場所に立つと、余計な力が抜ける。

背伸びをしなくなる。

他人になろうとしなくなる。

すると本来持っていた力が自然に現れ始める。

私はそれを「整う」という言葉で表現している。

整うとは、完璧になることではない。

本来の自分へ戻ることである。

■ 人生は身体から変わる

私たちは人生を変えたいと思う。

もっと良くなりたいと思う。

けれど、その第一歩は意外に小さい。

朝の空気。

窓から見える景色。

川の音。

山の姿。

温泉の湯気。

そんな日常の風景が身体に働きかけている。

そして身体が整うと、人生の流れも整い始める。

私はそう信じている。

人生を変える場所とは、特別な場所ではない。

あなたの身体が「ここだ」と感じる場所である。

その場所で深く呼吸ができたとき、人は本来の自分を思い出す。

そしてその瞬間から、人生は静かに、しかし確かに動き始めるのである。

第 6 章

身体が整う瞬間

――場所は人を本来の姿へ戻してくれる

私はこれまで、

氣質について考えてきた。

川の流れについて考えてきた。

火山と温泉が育てた大地について考えてきた。

そして家系という時間の流れについても見つめてきた。

それらを一つひとつ辿っていくと、最終的に戻ってくる場所がある。

それは身体である。

どれほど立派な理論も、身体が納得していなければ人生は軽くならない。

どれほど良い環境でも、身体が受け入れなければ本来の力は発揮されない。

反対に、身体が整うと人生は驚くほど自然に動き始める。

私は長い年月を通して、そのことを少しずつ理解するようになった。

■ 身体は頭より先に知っている

私たちは普段、頭で人生を考えている。

正しいか。

間違っているか。

損か得か。

成功するか失敗するか。

しかし身体は別の基準で生きている。

ある場所へ行くと呼吸が深くなる。

ある人に会うと安心する。

ある風景を見ると身体の力が抜ける。

理由は説明できなくても、身体はすでに答えを知っている。

私は人生の中で何度もそんな経験をしてきた。

頭では理解できなくても、身体はその場所との相性を感じ取っているのである。

■ 谷には谷の安心感がある

湯河原へ戻ると、私はいつも同じ感覚を覚える。

谷に包まれる感覚である。

見上げれば山がある。

耳を澄ませば川の音がある。

遠くには海の気配も感じる。

その地形の中にいると、不思議と安心する。

なぜなのかはわからない。

けれど身体は知っている。

この風景の中で育ち、

この空気を吸ってきたことを。

湯河原が優れているという話ではない。

私の氣質と、この谷の氣質が響き合っているのである。

人にはそれぞれ、そうした場所があるのだと思う。

■ 川の音は心の速度を整える

川の流れを見ていると、不思議と気持ちが落ち着く。

藤木川も。

千歳川も。

急いでいるように見えない。

しかし止まってもいない。

ただ自然に流れている。

私は川を見るたびに、人間も本来こういう存在なのではないかと思う。

必要以上に急ぐことはない。

立ち止まり続ける必要もない。

自分の流れを信じて進めばよい。

川の音には、人の心を本来の速度へ戻してくれる力があるように感じている。

■ 山は人生を長い時間で見せてくれる

山を見ると、自分の悩みが少し小さく見えることがある。

悩みが消えるわけではない。

けれど見え方が変わる。

山は何千年、何万年という時間の中でそこに立っている。

その時間の長さに触れると、自分が抱えている問題も人生の一場面として見ることができる。

山は何も語らない。

しかし存在そのものが、人の心を落ち着かせる。

私はそれを何度も感じてきた。

人間は短い時間を生きている。

だからこそ長い時間を持つ風景に救われることがあるのだと思う。

■ 温泉は身体を地球につなぐ

温泉に入ると、人は自然とため息をつく。

身体の緊張がほどけるからだ。

私は温泉を、単なる入浴施設として見ることができない。

温泉は地球の内部から届けられる熱である。

何万年もの時間を経て蓄えられた大地のエネルギーが、水によって地表へ導かれている。

その熱に身体が触れる。

すると身体だけでなく心まで整っていく。

私はそこに、人間と地球のつながりを感じる。

温泉に浸かることは、地球の時間に触れることなのかもしれない。

■ 身体が整うと出会いが変わる

人生を変えるのは決断だと思われがちである。

しかし実際には、その前に身体の状態が変わっていることが多い。

身体が整う。

呼吸が深くなる。

視野が広がる。

余裕が生まれる。

すると出会う人が変わる。

話す言葉が変わる。

興味を持つことが変わる。

そして人生の流れが少しずつ動き始める。

私は多くの人を見ていて、そのことを強く感じている。

人生は頭だけで変わるのではない。

身体から変わり始めるのである。

■ 身体が整うと本来の自分が現れる

人は無理をして生きることもできる。

頑張ることもできる。

しかし長く続けるためには、自分の氣質に合った場所が必要になる。

氣質に合う場所に立つと、余計な力が抜ける。

背伸びをしなくなる。

他人になろうとしなくなる。

すると本来持っていた力が自然に現れ始める。

私はそれを「整う」という言葉で表現している。

整うとは、完璧になることではない。

本来の自分へ戻ることである。

■ 人生は身体から変わる

私たちは人生を変えたいと思う。

もっと良くなりたいと思う。

けれど、その第一歩は意外に小さい。

朝の空気。

窓から見える景色。

川の音。

山の姿。

温泉の湯気。

そんな日常の風景が身体に働きかけている。

そして身体が整うと、人生の流れも整い始める。

私はそう信じている。

人生を変える場所とは、特別な場所ではない。

あなたの身体が「ここだ」と感じる場所である。

その場所で深く呼吸ができたとき、人は本来の自分を思い出す。

そしてその瞬間から、人生は静かに、しかし確かに動き始めるのである。

第 8 章

宇宙船地球号と私たちの座標

――あなたを生かす場所は必ず存在する

この本では、氣質について考えてきた。

身体が覚えている原風景について考えてきた。

藤木川や千歳川の流れを見つめてきた。

火山と温泉が育てた大地の力についても考えてきた。

そして家系という時間の流れをたどり、人生を変える場所について考えてきた。

ここで私は、もう一度視点を大きく広げてみたいと思う。

湯河原という場所。

神奈川県という場所。

日本という場所。

それらをさらに大きく包み込んでいる場所がある。

それが地球である。

■ 私たちは皆、宇宙船地球号の乗組員である

私は「宇宙船地球号」という言葉が好きである。

宇宙空間から見れば、地球は一つの美しい船のように見える。

青い海。

白い雲。

連なる山脈。

深い森。

無数の川。

そして生命。

その船の上で私たちは暮らしている。

普段の生活では忘れてしまうが、私たちは巨大な宇宙空間を旅し続けている。

国境も。

都道府県も。

町境も。

宇宙から見れば存在しない。

見えるのは地形であり、水であり、生命である。

私は地形を見続けるうちに、川も山も人間も、すべて同じ船の乗組員なのだと思うようになった。

■ 地球には無数の氣質がある

人に氣質があるように、地球にもまた無数の氣質がある。

雪国の静寂。

高原の透明な空気。

海辺の風。

森の湿度。

砂漠の静けさ。

火山の力。

島の時間。

谷の安心感。

それぞれが異なる個性を持っている。

だから人によって惹かれる場所が違う。

海に行くと元気になる人がいる。

山に囲まれると安心する人がいる。

都会の刺激に力をもらう人がいる。

静かな温泉地で本来の自分を取り戻す人もいる。

どれも正しい。

地球は多様な氣質を用意してくれているのである。

■ 人にはそれぞれの座標がある

私は長年、

「なぜ人は特定の場所に惹かれるのだろう」

と考えてきた。

その答えの一つが氣質だった。

人は自分の氣質と響き合う場所を求めている。

それは理屈ではない。

身体が先に反応する。

呼吸が深くなる。

安心する。

また訪れたくなる。

私は、その場所を「人生の座標」と呼びたい。

地図に書かれた座標ではない。

自分が最も自然に生きられる場所。

もっとも自分らしく在れる場所。

人生の流れが自然に動き出す場所。

それが、その人にとっての座標なのである。

■ 湯河原は私の座標だった

私にとって、その座標の一つが湯河原だった。

谷の空気。

藤木川の流れ。

千歳川の時間。

山々の存在感。

温泉の湯気。

湯治場として育まれてきた文化。

その風景の中に立つと、私は自分自身の輪郭を取り戻すことができる。

しかし、それは湯河原が誰にとっても最高の場所だという意味ではない。

私にとっての座標だったということである。

あなたには、あなたの座標がある。

海辺かもしれない。

高原かもしれない。

都市の中心かもしれない。

まだ訪れたことのない土地かもしれない。

大切なのは、自分の氣質と響き合うことである。

■「ここではない」という感覚も座標への案内である

第 1 章で私は違和感について書いた。

今振り返ると、その違和感は間違いではなかった。

むしろ案内役だった。

「ここではない」

「もっと自分らしく生きられる場所がある」

身体はそう伝えていたのかもしれない。

だから違和感を恐れる必要はない。

違和感は氣質からのメッセージなのである。

そして同時に、それは次の座標への入り口でもある。

■ 宇宙船地球号は広い

もし今いる場所が苦しいなら、思い出してほしい。

宇宙船地球号は驚くほど広い。

山もある。

海もある。

森もある。

川もある。

都市もある。

無数の文化があり、無数の風景がある。

私たちは時々、今いる場所がすべてだと思ってしまう。

しかし地球には、まだ出会っていない場所がある。

まだ知らない空気がある。

まだ感じたことのない時間がある。

そう考えるだけで、人は少し自由になれる。

■ あなたの場所は必ずある

私は地形を見つめ、人々の暮らしを見てきた。

その中で一つだけ確信していることがある。

それは、

人にはそれぞれ、生かされる場所がある。

ということである。

そこでは呼吸が深くなる。

身体が軽くなる。

思いが育つ。

出会いが生まれる。

人生が流れ始める。

その場所は有名な場所である必要はない。

便利な場所である必要もない。

ただ、あなたの氣質と響き合う場所であれば良いのである。

■ 座標との出会いは人生を自由にする

自分には自分の座標がある。

そう知るだけで、人は少し楽になる。

他人と同じ生き方をしなくてもいい。

同じ場所で成功しなくてもいい。

同じ価値観に合わせなくてもいい。

大切なのは、自分の氣質と出会うことである。

私たちは皆、宇宙船地球号の乗組員である。

それぞれ異なる氣質を持ち、それぞれ異なる座標を持ちながら、この美しい星を旅している。

人生とは、自分の座標を探し、その場所と出会い、そして生かされていく旅なのかもしれない。

そして私は信じている。

あなたの場所は、必ずどこかに存在しているのである。

第 9 章

Imagine ——今、神を想う

——あなたはすでに奇跡の場所に生かされている

私はジョン・レノンの『Imagine』が好きである。

若い頃から何度も聴いてきた曲だが、歳を重ねるにつれて、その歌が語りかけている世界の見え方が少しずつ変わってきた。

Imagine。

「想像してごらん。」

この言葉には不思議な力がある。

人間は今見えているものだけで生きているわけではない。

想像することで、新しい景色を見ることができる。

未来を描くこともできる。

自分の可能性を信じることもできる。

私はこの「イマジン」という響きの中に、もう一つの意味を重ねている。

それは、

「今、神（いま・かみ）」

である。

もちろん言葉の由来ではない。

私自身が感じている言霊である。

今この瞬間に存在していること。

今ここに生かされていること。

その奇跡に気づくこと。

そんな意味を感じている。

■ 場所を探す旅を続けてきた

この本では、場所について考えてきた。

違和感から始まり、

氣質を見つめ、

川の流れを見つめ、

火山と温泉の力を感じ、

家系という時間をたどり、

人生を変える場所について考えてきた。

けれど今振り返ると、私は場所を探していたのではなく、自分自身を探していたのかもしれない。

人は人生のどこかで、

「自分はどこにいるのだろう」

と問いかける。

その問いへの答えは、心の中だけにあるわけではない。

場所の中にもある。

風景の中にもある。

人との出会いの中にもある。

だから私たちは旅をする。

だから私たちは場所を求める。

■ 人生は出会いによってつくられる

人生を振り返ると、記憶に残るのは出会いである。

親との出会い。

友との出会い。

師との出会い。

仕事との出会い。

土地との出会い。

一冊の本との出会い。

一つの言葉との出会い。

その積み重ねが人生になっている。

私は第 7 章で、

「人生を変える出会いは、人と人との間だけでなく、人と場所との間にも起きる」

と書いた。

今もその思いは変わらない。

場所が人を呼ぶ。

人が人を呼ぶ。

そうして人生の流れが生まれていくのである。

■ 場所は人生の土壌である

私は長年、

「人生は場所が 9 割」

と考えてきた。

その真意は、努力を否定することではない。

むしろ逆である。

努力を育てる環境の大切さを伝えたいのである。

種だけでは花は咲かない。

土が必要である。

水が必要である。

光が必要である。

人もまた同じである。

夢という種。

希望という種。

挑戦という種。

その種を育てる土壌が場所なのである。

だから人生は場所に大きく影響される。

私はそのことを地形から学び、人々の暮らしから学び、自分自身の人生から学んできた。

■ あなたはすでに奇跡の中にいる

しかし今、私はもう一歩大きな視点で考えたい。

私たちは皆、自分に合う場所を探して生きている。

もっと自分らしく生きられる場所を探している。

もっと安心できる場所を探している。

それは大切なことである。

しかし忘れてはならないことがある。

それは、

私たちはすでに奇跡の場所に生きている。

ということである。

地球である。

空気がある。

水がある。

生命がある。

山があり、

川があり、

森があり、

海がある。

私たちはその中に生かされている。

それは決して当たり前ではない。

■ 宇宙船地球号の本当の意味

私は「宇宙船地球号」という言葉が好きである。

その理由は、人間中心の考え方を優しく超えていくからである。

私たちは普段、

自分の人生を考え、

自分の仕事を考え、

自分の悩みを考えている。

しかし宇宙から見れば、そのすべては地球という一つの船の上で起きている出来事にすぎない。

山も乗組員である。

川も乗組員である。

森も乗組員である。

鳥も魚も動物も乗組員である。

そして私たち人間も、その一員である。

誰かだけが特別なのではない。

すべてがつながりながら旅を続けている。

それが宇宙船地球号なのである。

■ 場所を愛することは地球を愛すること

私は湯河原を愛している。

藤木川を愛している。

千歳川を愛している。

山を愛している。

温泉を愛している。

しかしそれは湯河原だけが特別だという意味ではない。

誰にでも大切な場所がある。

故郷がある。

原風景がある。

心が帰っていく風景がある。

その場所を愛することは、地球の一部を愛することだと思う。

そしてその愛は、やがて地球全体への愛につながっていく。

■ 宇宙から見れば、私たちはすでに豊かである

私たちは不足を見つめがちである。

もっと成功したい。

もっと豊かになりたい。

もっと良い人生を送りたい。

それは自然な願いである。

しかし宇宙から地球を見たらどうだろう。

青い海。

白い雲。

緑の森。

無数の生命。

その景色の中に私たちはいる。

そう考えると、

人生は場所が 9 割どころではないのかもしれない。

私たちは生まれた瞬間から、すでにその 9 割を与えられているのである。

■ Imagine ——想像してごらん

もし人生に迷ったら、

少しだけ立ち止まってほしい。

空を見上げてほしい。

山を見てほしい。

川の音に耳を澄ませてほしい。

そして想像してみてほしい。

あなたが今立っている場所も、

あなたが探している場所も、

すべて地球という一つの船の上にあることを。

あなたは今、

宇宙船地球号の上で生きている。

出会い、

学び、

悩み、

喜び、

成長しながら旅を続けている。

それだけで十分に尊い。

■ 人生は場所から始まり、地球へ帰っていく

この本は違和感から始まった。

そして氣質へ向かい、

川へ向かい、

火山と温泉へ向かい、

家系へ向かい、

人生を変える場所へ向かった。

そして最後に、地球へたどり着いた。

私は今、こう思っている。

人生は場所が 9 割。

その場所とは家だけではない。

町だけでもない。

国だけでもない。

究極的には地球そのものである。

私たちは皆、美しい宇宙船地球号の乗組員なのである。

だから安心してよい。

焦らなくてもよい。

あなたを生かす場所は必ずある。

そして、その場所を探す旅そのものが人生なのである。

Imagine。

想像してごらん。

あなたは今、奇跡の場所に生きている。

終章

人生は場所から静かに軽くなる

この本は、一つの違和感から始まった。

なぜ同じ人間なのに、ある場所では力が湧き、ある場所では疲れてしまうのだろう。

なぜ理由もなく心が惹かれる風景があるのだろう。

なぜ人生を変える出会いは、ある特定の場所で起こるのだろう。

そんな問いを追いかけながら、私は氣質について考え、川を見つめ、山を見上げ、温泉の湯気の向こうにある時間を感じてきた。

そして家系という流れを見つめ、人と土地との関係を考え続けてきた。

この本で書いてきたことは、一見すると別々の話のように見えるかもしれない。

しかし私の中では、すべてが一本の流れでつながっている。

■ 人生は流れの中にある

藤木川は教えてくれた。

生命とは流れ続けることだと。

千歳川は教えてくれた。

時間とは受け継がれていくものだと。

火山と温泉は教えてくれた。

目に見える風景の奥には、気の遠くなるような時間があることを。

家系は教えてくれた。

人は一人で生きているのではないことを。

そして場所は教えてくれた。

人生は環境によって大きく育まれることを。

振り返れば、すべて流れの話だった。

生命の流れ。

時間の流れ。

文化の流れ。

家系の流れ。

人生の流れ。

私たちは、その流れの一部なのである。

■ 人は変わるのではなく、戻るのかもしれない

若い頃の私は、自分を変えようとしていた。

もっと努力しよう。

もっと成長しよう。

もっと強くなろう。

そう考えていた。

もちろん努力は大切である。

成長も必要である。

しかし今は少し違う考えを持っている。

本当に大切なのは、自分を別人にすることではない。

本来の自分に戻ることなのではないか。

そう思うのである。

氣質に合う場所に立つと、人は無理をしなくなる。

深呼吸ができる。

肩の力が抜ける。

そして本来持っていた力が自然に現れてくる。

整うとは、完璧になることではない。

本来の自分を思い出すことなのである。

■ 比べる必要はない

この本を書きながら、何度も感じたことがある。

それは、人それぞれ座標が違うということである。

都会で輝く人がいる。

海辺で生き生きする人がいる。

山に囲まれて安心する人がいる。

温泉地に帰ってくることで力を取り戻す人もいる。

どれも正しい。

どれも間違いではない。

だから他人と比べる必要はない。

誰かの成功を自分の基準にする必要もない。

大切なのは、自分自身の氣質を知ることであり、自分に合った場所を知ることである。

人生には、それぞれの流れがある。

■ あなたを生かす場所は必ずある

もし今、自分の居場所がわからないと感じている人がいたら伝えたい。

焦る必要はない。

無理に答えを出さなくてもよい。

なぜなら、人にはそれぞれ生かされる場所があるからである。

呼吸が深くなる場所。

身体が軽くなる場所。

また帰りたくなる場所。

理由は説明できなくても、心が落ち着く場所。

その場所は必ずある。

まだ出会っていないだけかもしれない。

気づいていないだけかもしれない。

しかし氣質は、その場所を知っている。

身体は、その場所を覚えている。

だから人生は、場所を探す旅でもあるのだと思う。

■ すでに与えられているもの

そして最後に、もう一度だけ宇宙船地球号の話をしたい。

私たちは人生の中で、多くのものを求める。

より良い環境。

より良い仕事。

より良い未来。

それは素晴らしいことである。

しかし忘れてはならないことがある。

私たちはすでに、かけがえのない場所を与えられているということである。

山がある。

川がある。

森がある。

海がある。

空がある。

そして生命がある。

私たちは、その美しい地球の上に生きている。

宇宙規模で見れば、それだけでも奇跡なのである。

■ 人生は場所から静かに軽くなる

私は今、「人生は場所が 9 割」という言葉を以前より広い意味で受け止めている。

それは住む場所だけの話ではない。

どんな風景に触れるのか。

どんな人と出会うのか。

どんな時間を生きるのか。

そして、どんな地球の一部として生きるのか。

そのすべてが人生を形づくっている。

人生は無理に重いものへ挑むばかりではない。

自分に合う場所を見つけたとき、人はもっと自然に生きられる。

もっと深く呼吸できる。

もっと自分らしく生きられる。

人生は場所から静かに軽くなる。

私はそう信じている。

そして願っている。

この本を閉じたあと、あなたが少しだけ空を見上げることを。

川の音に耳を澄ませることを。

自分の身体の声を聞くことを。

その先に、あなた自身の座標との出会いが待っているかもしれない。

人生は場所が 9 割。

その本当の意味は、

あなたが本来の自分に戻れる場所が、この地球のどこかに必ずある。

あとがき

あなたの座標へ

最後までこの本を読んでくださり、ありがとうございます。

一冊の本を書き終えるたびに思うことがあります。

本は著者が一人で書くように見えて、実はそうではないということです。

私の場合、この本を書かせてくれたのは湯河原という土地でした。

藤木川の流れ。

千歳川の時間。

新崎川の静かな風景。

山々の稜線。

温泉の湯気。

そして、この土地で生きてきた人々。

それらが少しずつ言葉になり、この本になりました。

私自身は、ただそれを書き留めただけなのかもしれません。

若い頃の私は、人生とは努力によって切り拓くものだと思っていました。

今でも努力の大切さは変わりません。

しかし年齢を重ねるにつれて、もう一つ大切なことが見えてきました。

それは、人は一人の力だけで生きているのではないということです。

土地に支えられ、

人に支えられ、

家族に支えられ、

自然に支えられながら生きています。

そのことに気づくと、不思議と肩の力が抜けます。

私はこの本を通して、

「湯河原は素晴らしい」

と言いたかったわけではありません。

本当に伝えたかったのは、

「あなたにも、あなたを生かす場所がある」

ということです。

それは故郷かもしれません。

今住んでいる場所かもしれません。

まだ訪れたことのない土地かもしれません。

あるいは特定の町ではなく、一緒にいて安心できる人々のいる場所かもしれません。

場所とは地図だけで決まるものではないからです。

もし今、人生に迷いがあるなら、少し身体の声に耳を傾けてみてください。

どこへ行くと呼吸が深くなるだろう。

どんな風景を見ると心が落ち着くだろう。

どんな人といると自然な笑顔になれるだろう。

その感覚の中に、氣質からの大切なメッセージが隠れていると思います。

頭よりも先に、身体は知っていることがあります。

この本の終盤で、私は「宇宙船地球号」という言葉について書きました。

今、改めて思います。

私たちは皆、この美しい星の旅人です。

山も。

川も。

森も。

海も。

人も。

同じ船の上で生きています。

だから本当は、誰も孤独ではないのかもしれません。

私たちは皆、大きな流れの一部だからです。

最後に、あなたへ。

どうか焦らないでください。

人生には、それぞれの速度があります。

藤木川には藤木川の流れがあります。

千歳川には千歳川の流れがあります。

そしてあなたには、あなただけの流れがあります。

誰かと比べる必要はありません。

自分の流れを信じてください。

自分の氣質を信じてください。

そして、自分を生かしてくれる場所との出会いを信じてください。

きっとその場所はあります。

もしかしたら、すでにあなたのすぐそばにあるのかもしれません。

人生は場所が 9 割。

その言葉の本当の意味は、

自分を生かしてくれる場所に出会ったとき、人は本来の自分として生き始める。

ということなのだと思います。

この本が、あなた自身の座標を見つける小さなきっかけになれば、著者としてこれ以上の喜びはありません。

心からの感謝を込めて。

稲葉 勉
湯河原にて

著者プロフィール（書籍掲載版）

稲葉 勉（いなば つとむ）
一級建築士・地形学研究家。湯河原生まれ。東京で建築を学び、都市の中で暮らすなかで、人と場所との関係に強い関心を抱く。故郷・湯河原に戻ってからは、藤木川、千歳川、新崎川の流れや、火山と温泉が育んだ地形文化を見つめ続けてきた。近年は「氣質とは身体が覚えている原風景である」という視点から、人を生かす場所の研究を続けている。著書『人生は場所が 9 割』では、人生と土地、そして宇宙船地球号としての地球を結ぶ新しい場所論を展開している。